

■学位論文内容要旨

特別支援教育における教師の指導力に関する研究

後藤 浩之 (2014年度修了)

1. 研究目的

現在、障がいのある児童生徒の教育については、「特殊教育」から「特別支援教育」に大きく転換し、「自立」などの考え方もとらえ方もそれに伴い、単なる知識・技能の習得ではなく、自己選択を含んだ学習者の主体性を尊重したものに变化している。

ところが、現場では、教師同士が目前にいる児童生徒に対して、技能的なことに長けた教師こそが能力のある教師であるという考え方が依然として根強く、知識や技能獲得競争に傾斜している傾向がある。また、学校や家庭、社会の中で現実の子どもたちは、「生きづらさ」を抱え、様々な壁に直面している。障がいを有すること自体が「生きづらさ」につながるが、「生きづらさ」の根源は、障がいを有することで社会からの差別や偏見を受けていることである。教師はそのことを的確に理解しなければならない。学校教育における教師の使命は、差別や偏見に苦しんでいる人々を解き放し、「生きづらさ」や「現実の厳しさ」などの壁を取り除き、それらをつなぎ埋めていくことである。

ところで、1960年代以降に限っても、日本が抱えている学習権の弱さ、生きる力を十分に付けさせられていない現実の中で、「特殊教育」時代から「現実の厳しさ」を理解しながら、学習権や生きる力などを意識して実践し、指導力向上に努めながら、子どもたち一人ひとりと真摯に向き合いながら教育実践をしている教師達がいる。

本論文は、このような障がい児教育の教師達の過去の蓄積された実践の分析を抽出し、それらの実践を生かしながら、筆者自身が、今後、特別支援教育に携わる教師として、指導力向上など「特別支援教育」時代に求められる教師として何が必要であるのか考察する。

2. 研究方法

本論文は、障がい児教育に取り組んだ代表的な実践者である坂爪セキ（小学校障がい児学級・1960～1980）と三木裕和（特別支援学校・1970～）の実践を分析している。その際、2人の実践として、特に坂爪については、『生きる力をこの子らに 障害児学級12年の実践』、三木については、『人間を大切にするしごと』、『重症児の授業づくり』という文献を使用し、その分析をもとに筆者が取り組んできた実践を検討している。

3. 本論文の概要と結論

1章では、特殊教育から特別支援教育に至る戦後日本における障がい児教育の政策の変遷を年代ごとに整理し、特別支援教育の理念と枠組みを概観した。また、特別支援教育に変わり、新たに生じた幾つかの問題点を特別支援教育の教師としての指導力の向上という観点から述べた。

2章では、まず、身体障がいなどに比べて「学び」の視点からみた場合に不利益を被ることの多いと考えられる知的障がいに焦点を当て、障がい者に対する様々な偏見や差別による「生きづらさ」について、(1)学校教育、(2)家庭の中での実態を整理した。以前は、障がい自体により「生きづらさ」があると考えられていた。今は、周りから正しく理解されないという偏見や差別などのために障がいをもつ人々の多くが不利益を被り、「生きづらさ」を感じていると考えられる。

「特別支援教育」への転換の中で、その理念の形成と法律の整備が進められてきたが、障がい児は、日常の生活・学習において様々な「生きづらさ」を抱えており、

その恩恵を十分に受けているとは言い難い。理念・法律と現実との間には大きな隔たりがあり、その隔たりを解消するためには、前者の実現を阻むもの、つまり、障がい児が「生きづらさ」を感じる要因を把握する必要がある。次に、学校教育において、障がい児の「生きづらさ」の解消において、児童の「生きづらさ」を日々の実践から温かく包みこみ、生きていくための力に結び付けている障がい児教育実践者（坂爪セキ・三木裕和）を取り上げた。

坂爪は、障がいを有する子どもの親に対する思いから、毎日の授業に力を注ぎ、子どもたちと分かり合える喜びの中で、遅々としていても確かな学力をつける以外にはないという考えのもと、(a)より確かな授業をめざす、(b)みんなで学び合い、自らの力で誤りを訂正する、(c)誇り→自信→学習意欲、(d)からだを使うわかる授業の4つであるとした。これらの実践のもと、子どもたち一人ひとりの考えを引き出し、それをぶつけ合わせ、誤りを自ら発見し、自らの力で真実に迫れる子を育てる「授業の中で育つ子どもたち」という観念のもと実践した。この実践のもと、今まで出来なかったことが出来るようになっていく「新しい世界」の獲得により、自信や意欲をもつことができたとした。

三木の実践は、まず教師は、授業づくりが、「本体」であり、授業は、人類の文化や科学を子どもたちに分かり伝える営みである。授業内容において、「当たり前」のことをていねいに取り組む姿勢」であり、人間が生きていく上で、「幸福の種」や「幸福感」を提示することができたり感じたりすることができるような時間を児童・生徒に提供し、「幸せを感じとる力」が生涯の長きにわたり維持し発展していく内容になるようにすることである。

3章では、まず、坂爪・三木の子どもに対するとらえ方を整理した。坂爪は、特殊教育の教師として日々じっくり打ち込む中で、子どもの実態に則した、教育指導の作成や、様々な障がいを有する児童に対する指導などを研究する態度により、児童一人ひとりを大切にしていた。

三木は、子どもたちを愛することに加え、教師は、障

がいのある子どもを「人格的存在」として、何を感じ、何を分かり、何を願って生き、何をつらいと思い、何を喜びとして生きているのかという「人格のはたらき」を追体験する仕事であるとした。また、子どもの心を理解し、信頼関係を築くため、教師は、感覚を研ぎ澄まし、何を感じているのかを子どもの内面から想像し理解する必要がある。

次に彼らの実践から、教育の柱を取り出し、筆者が、これまでの障がい児教育に対する取り組みを分析し、今後、特別支援の教師として必要であることを論述した。

坂爪は、子どもたちの可能性を信じ、授業を通して、常に子どもたちに考えさせ発見をさせていた。三木は、子どもたちの「心を理解する」ことでやりがい、意欲、喜びを感じることの大切さを強調し、教師は、教育実践を通じて、子どもを理解する力量を高め、子どもから常に学ぶ姿勢が必要であり、障がいをもって生きる子どもたちの「人間の尊厳」を守ることを大切にしている。

その結果、教師として、

- ①どこまでも発達の可能性を信じる
- ②障がい児が「生きている」という実感を味わうことができるような授業づくり
- ③子どもから学び、深く子どもたちを愛することが必要であることが見えてきた。

4. 今後の課題

今回の論文は、教師の障がい児教育に取り組む指導力向上について、坂爪・三木の教育実践をもとに、まず、授業について求められる力について考察した。しかし、教師に必要な指導力は授業に限られたものではない。それに加えて、地域や保護者との関係の構築においても求められるであろう。今後は、いかにして、地域や保護者とより良い関係を築き、深めるために教師に求められる力は何かにについても考察していきたい。また、障がい児が社会に出た後、自立した生活が送れるようにするため、社会とつながることができるような橋渡しができるような指導についても考えなければならない。